

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。

皆さんが、東京未来大学の新しい構成員となられることを心より歓迎いたします。

人間は知らないということ、わからないということに耐えられない生き物だと言われます。

気候変動や大規模災害、AI の急速な普及、地域紛争、所得格差や貧困といった社会問題ばかりではなく、友人の態度や言動から自分の性格、タレントのスキャンダルに至るまで、私たちはあらゆる事柄になぜ、どうしてと疑問を持ち、その理由や原因を知りたいと思い、理解しようとしています。

この、物事を知ろうとする行動は人間の成長発達のとて早い時期、赤ん坊のころから既に存在します。生まれて数か月の赤ん坊は、目の前にあるもの、たまたま手に触れたものを何でも口へ持っていき、なめようとしています。このような行動を飽きずに何度も繰り返します。発達心理学では、こうしたことは、赤ん坊が未知の対象を理解するための行動だと考えます。皆さんなら、知らないこと、知りたいことがあれば、先生や友達に聞いたり、ネットで調べたりすると思いますが、赤ん坊はその代わりになめること、しゃぶることによって、未知のものを知ろうとしているわけです。人間は生まれつき「知りたがり屋」だということもできるかもしれません。

高度情報社会と言われる現代においては、ネット上の情報によって、様々な事柄を簡単に知ることができます。最先端の科学研究から極めてプライベートな情報まで、あらゆる情報を瞬時に手に入れることが可能です。むしろ、私たちは、膨大な情報の中に埋もれて生活していると言った方が正しいかもしれません。

情報の洪水の中では、その情報が本当に求めている情報なのか、真実の情報なのかを判断するのは、とても難しいことです。あふれる情報の中にはフェイク情報、真偽の疑わしい情報も多く含まれています。先日の能登半島地震の際にも、東日本大震災の動画を使ったフェイク情報が SNS を通じて世界中に拡散されました。また、事実とは異なる情報による個人攻撃や誹謗中傷が SNS 上でなされ、不幸な結果を招く例も最近多く報じられています。海外では、SNS の使用を禁止したら、その人の幸福度が上がったという研究すらあります。私たちは真偽の不明な情報の洪水にのまれ、翻弄されているということもできるかもしれません。

何が真実で何が真実でないのか。この判断のよりどころとして、多用されるのが「科学的」という表現です。東京電力福島第一原子力発電所の処理水の海洋放出にあたって、フェイク情報を含む様々な情報発信がなされましたが、海洋放出の正当性、安全性を示すために多用されたのが「科学的根拠」という言葉でした。「科学的」という言葉は、現象の正確性、厳密性、客観性を示す表現であり、情報の真偽を判断する基準、決め手として有効に機能し得るものでしょう。しかし、科学的検証の内実を吟味せず、言葉だけを鵜呑みにして妄信することは危険です。自ら、主体的に情報の真偽を問わない限り、フェイク情報に踊らされることと何ら変わらない状況に陥ってしまうのではないのでしょうか。高度情報社会とは、情報の

価値を見極める、私たち自身の知性が問われている社会だと言うことができるかもしれません。私たちに求められているのは、情報の有効性を見極め、判断し、峻別して、適切な利用ができる力量を身につけることです。

皆さんは、これから4年間、東京未来大学で様々なことを体験し、学ぶことになります。大学での新しい学びを進めていくうえで大切なのは、他者との深い交流の中で、共に学び、考えるということです。

他者と共に学ぶということは、学習意欲を高めるという働きがあり、効率的に学びを進めるうえで有効な方法ではあります。ただ、私が申し上げているのはそのことではありません。先ほど申し上げた情報の有効性を見極める力を獲得するためには、知識の相対化、自己の相対化が何より重要です。他者との活発な議論、真摯な討論は、自己の知識の浅薄さ、思考の偏狭さへの気づきを促すとともに、言説の絶対性を疑い、情報の本質を見抜く力を養ってくれるはずです。

大学で友と共に学び、議論し、あらゆる体験、経験に主体的、積極的に関与することによって、ますます複雑化し、不確実性の高まる現代の高度情報社会を生き抜く知性と力量を備えた存在となって欲しいと願っています。

東京未来大学での4年間は、皆さんにとって素晴らしいものとなることを、心より祈念しています。

改めまして、ご入学おめでとうございます。

令和6年4月1日
東京未来大学学長 塚本伸一